様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　８日現在

機関番号：12601
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：21720102
研究課題名（和文）十八世紀英国小説における匿名性とリアリズムの起源

研究課題名（英文）
Anonymity and the Origin of Realism in Eighteenth-Century British Fiction
研究代表者
武田　将明（TAKEDA　MASAAKI）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：10434177

研究成果の概要（和文）：18 世紀初頭、英国小説は、匿名を用いて実録の体裁を取ることで、娯楽的なロマンスから現実的な文学様式を新たに作り出すことに成功した。しかし、事実によって虚構性を抑圧することは、小説の可能性を狭めることにもつながった。そこで 18 世紀中ごろから、この新様式の特徴を損なうことなく、いかに巧みなプロットを構築するかという試みがなされ、これと同時に作者の名前が表面化する。本研究は、18 世紀英国小説におけるリアリズムと物語性との相互作用を、匿名性の問題と関連づけて考察したものである。

研究成果の概要（英文）: In the early eighteenth century, British fiction often concealed the name of the author and pretended to be non-fictional record. On the one hand, this pursuit of realism triggered the birth of a new style of prose fiction which is distinct from that of vulgar, unrealistic romances. On the other hand, however, it narrowed the possibility of prose fiction by suppressing any artificial element in order to highlight reality. Around the middle of the eighteenth century, therefore, novelists attempted to harmonize the composition of plot with the characteristics of the new, realistic fiction, which coincided with the reappearance of the authors' names in novels. This research dealt with the interaction between realism and artificiality in eighteenth-century British novels mainly from the perspective of anonymity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学　　英米・英語圏文学
キーワード：18 世紀　近代小説　リアリズム　匿名性　作者

１．研究開始当初の背景
2007 年から 2008 年にかけて、「英国小説史再考――1688 年から 1727 年まで」という研究課題で科学研究費補助金（若手 B）を交付された。この研究を通じて、近代小説に関する基礎概念を再設定することから始めなければ、本当に英国小説史を書きかえることはできないと痛感した。折しも、2007 年に John Mullan による *Anonymity: A Secret History of English Literature* という書物が出版され、匿名性という概念が 18 世紀英国小説を根本から捉え直すための鍵となることに気づかされた。Mullan の書物は、問題意識こそ優れているが、決して小説というジャンルに関する再定義を試みたものではない。そこで、18 世紀英国小説に関する自分の知見を応用

しながら、この方向性から近代小説に関する新たな認識を獲得し、英国小説史を書きなおすことはできないかと考えた。

２．研究の目的
上述の通り、匿名性の問題に注目しながら英国小説史を書き直すことを目標としているが、同時に本研究は狭義の英文学研究の枠内に留まるものではなく、世界文学的な観点から「近代小説とは何か」という問いに答えるための重要なヒントを得ることも目標としていた。

３．研究の方法
できるだけ18世紀当時の出版状況をリアルに知るために、大英図書館やケンブリッジ大学図書館に滞在し、18世紀の文学作品の現物を読んだ。日本にいるあいだも、当時の書物をそのままの姿で読むことのできるデータベース *Eighteenth Century Collection Online* を活用した。
当然ながら、18世紀文学に関する新しい研究書・論文を定期的に読み、英米の研究水準を意識しながら研究を進めた。

４．研究成果
(1)書簡体小説と匿名性
英国における匿名によるリアリズム小説の歴史はDefoe, *Robinson Crusoe* (1719) に始まり、1740年代に発表されたリチャードソンの諸作によって確立されたという見方は、Ian Wattの *The Rise of the Novel* (1957) 以来、大きな異論は出ていない。しかし本研究では、*Robinson Crusoe* とほぼ同時期の1720年に発表されたHaywoodによるフランス語からの翻訳小説 *Letters from a Lady of Quality to a Chevalier* に注目することで、第一に17世紀フランスですでに生れていた書簡体小説が、匿名によるリアリズム小説として *Robinson Crusoe* より古いことを指摘し、*Robinson Crusoe* をヨーロッパにおける近代リアリズムの祖とする英米圏では根強い考え方に異議を唱え、さらにHaywood という、一般にはロマンス作家としてDefoeと明確に区別されている作家も、翻訳を通じて英国におけるリアリズム小説の成立に貢献していることを示唆した。さらに、この翻訳をフランス語原典と比較することで、英国18世紀小説に特有な文体の特徴を明確化し、それにaffective writingという名称を与えた。さらに、これと対をなす概念としてreflective writingという名称も考案した。
この成果の多くは、論文「イライザ・ヘイウッドの翻訳――模倣と創造」に示されているが、とりわけ affective writing という概念については今後も発展の余地がある。たとえば、Haywood と同時代の Defoe の小説と結び付けて論じることで、リアリズム小説とロマンスという既存の図式を塗り替える英国小説史を構想できるはずである。

(2)小説の時間操作と匿名性からの脱却
少なくとも部分的にはリアリズム小説の伝統に属しながら、取りたてて匿名性を維持しようとせず、むしろ作者の姿を前面に出した作品を書いたFieldingの作品、とりわけ *Tom Jones* (1749) について、Watt の言うような「不徹底なリアリズム」として捉えるのではなく、むしろ Defoe と Richardson の直面した近代リアリズムの弱点を乗り越え、ヴィクトリア朝における小説の隆盛を準備したものとして再評価を試みた。
近代リアリズムの弱点とは、一言でいえば「現在」という一点の描写に専念するあまり、物語の構成が散漫になってしまうことである。これに対し、フィールディングは意識的に偶然性を組み込んだプロットを工夫することで、近代小説に「時間」を導入するのに成功している。この「操作された偶然性」の登場が、同時に散文フィクションにおける作者名の再浮上をもたらしている。
Fielding 以降、「作者」の手柄はいかに荒唐無稽な話を作り上げるかではなく、いかにリアルに偶然を組み合わせ、近代リアリズムとプロットという相矛盾する要素を調和させるかにかかってくる。そのような新しい役割を与えられることで、作者は文学において復権し、18世紀後半から19世紀にかけて生じた商業システムとしての小説の確立と小説家のアイコン化（Fielding以降の世代、とりわけ Sterne が示しているような）が進展していくのである。
この方面の研究成果として、口頭発表「*Tom Jones* における時間」がある。また、現代日本文学の作品において、物語の誘惑に抗しつつ偶然性とリアリティとを両立させている川上未映子『ヘヴン』(2009) を論じた「美しい物語とただの美しさ――『１Ｑ８４』と『ヘヴン』を通じてみる世界」も、ここから派生した業績である。

(3)文学のグローバル化と匿名性
初期の近代小説がしばしば匿名で書かれた理由は、リアリズムを追求しただけではない。Aphra Behn, *Oroonoko* (1688) や Defoe, *Robinson Crusoe* を読んで気づくのは、英国の近代小説は、ローカルな価値観が無効化される極限状況を背景とした、グローバルな文学だったということだ。前者においてはアフリカの王子が南アメリカで奴隷になり、最後は身体を切り刻まれ、肉の塊となって死ぬ。後者では英国人の主人公が北アフリカで奴隷となり、南アメリカで奴隷を使う農園主と

なり、さらに南アメリカの沖合の島で「食人種」の恐怖にさらされる。このような、過去の価値観がすべて崩壊し、自分のアイデンティティーの根幹をなす名前など意味を失ってしまう空間（*Oroonoko*、*Robinson Crusoe* はもちろんのこと、英国 18 世紀小説では名前の変更というテーマが頻出する）、*Robinson Crusoe* の「無人島」に象徴されるような空間が、そもそも近代小説の根源に存在しているのであり、よって近代小説における「匿名性」は、ヨーロッパという一地方の文化が政治経済のグローバル化によって直面した混乱を暗示する、一つの印でもあるのだ。
この問題は、日本英文学会第 83 回大会における特別シンポジウム「近代小説は死んだのか？――小説の過去・現在・未来」を準備する過程で考察を深め、私は企画者なので登壇しなかったものの、この論点はシンポジウムにおける議論で取り上げられた。私自身の関連論考は、いま執筆中である。
また、これも未刊行の業績だが、上記の問題意識を念頭に、*Robinson Crusoe* の新しい翻訳を完成させ、解説もほぼ執筆を終えた。現在校正段階であり、2011 年中に出版される予定である。
刊行された業績のなかでは、大澤信亮『神的批評』(2010) を論じた「批評の食人鬼（カニバル）」において、食人の問題と共同体の崩壊を関連付けたのは、この研究から得られた知見に拠っている。

(4)現代日本文学における匿名性
匿名で執筆する作家ではなく、匿名性と小説というテーマで本研究を考えた場合、現代日本の小説において、ネット社会における匿名化の進行に注目した作品が少なからず発表されている。星野智幸『俺俺』(2010) を論じた「責任と勝負の行方」は、近代小説の行き詰まりがもたらしたキャラクター小説の隆盛のさらに次に来る小説として、この作品がもっている匿名性がいかに重要であるかを指摘した。また、『顔のない裸体たち』（2006）以降、つねに匿名性の問題を扱っている平野啓一郎に注目し、本人へのインタヴュー、『あなたが、いなかった、あなた』の文庫版への解説の執筆、および上述の特別シンポジウムの企画運営を行った。こうした活動を通じて、英文学研究が文学の現場に介入する可能性を模索した。

(5)その他の成果
「主な発表論文」にはあえて掲載しなかったが、文学関連の書評を８本執筆している。また、18 世紀英国文壇の中心にあった Johnson の *Lives of the English Poets* (1779, 1781) から、Dryden を扱った代表的な一篇を翻訳・出版した。翻訳では、Defoe, *The Journal of the Plague Year* (1722) の新訳にも取り組み、2011 年 4 月より『Web 英語青年』に連載しているが、本研究で Defoe 作品における作者のあり方を考察したことを参考にしつつ訳している。さらに、Swift, *Gulliver's Travels* (1726) に日本語で詳しい注釈をつける作業を継続しており（2011 年～2012 年に出版予定)、本研究の成果を様々な点で反映させている。

(6)今後の展望
以上のように、18 世紀英国小説について、さらには近代小説の本質について、様々な新しい知見を得ることができたが、どの点についてもさらなる発展が見込まれる。まず、英国小説史を隣国フランスとの関連で、さらにはヨーロッパを超えたグローバルな文脈で読み直すための鍵が与えられたので、今回扱えなかった作家、たとえば Sterne や Austen の小説に応用することで、英国小説史を書き直すという大きな目標により近づけるだろう。また、小説における時間の操作、プロットの新しい形での導入については、Fielding に関する本格的な論文を執筆するべきであるし、さらにこの方面からも Sterne を論じる必要がでてくるだろう。そして今回の研究で得られた成果を現代文学にいかに応用できるかについても、試みはまだ十分とはいえず、今回の研究を通じて得られた知識や人脈をもとに、文学研究と創作の現場との架け橋となるような仕事にも取り組んでいきたいと考えている。
最後に、広範な文献の収集や休暇中の英国での資料調査は、科学研究費補助金があってはじめて可能であった。このことに心より感謝申し上げる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①武田将明「批評の食人鬼（カニバル）」『群像』（査読無）1 月号、2011 年、342-43 頁
②武田将明「責任と勝負の行方」『群像』（査読無）9 月号、2010 年、314-15 頁
③武田将明「美しい物語とただの美しさ――『１Ｑ８４』と『ヘヴン』を通じてみる世界」『早稲田文学』（査読有）３号、2010 年、247-59 頁

〔学会発表〕（計２件）

①武田将明「*Tom Jones* における時間」18 世紀イギリス文学・文化研究会、2010 年 10 月 23 日、専修大学神田校舎

②武田将明（代表：学会プログラムでは齋藤衛が司会となっているが、当日までに予定が変更となり、武田が司会・進行を担当した）・齋藤衛・清水徹郎・岩田美喜「コモン・リーダーは復権できるか――文芸批評と作品論」2009 年 5 月 30 日、日本英文学会第 81 回大会、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計２件）

①武田将明ほか 18 名、開拓社、『十八世紀イギリス文学研究：交渉する文化と言語』（「イライザ・ヘイウッドの翻訳――模倣と創造」を執筆）、2010 年、118-39 頁

②サミュエル・ジョンソン著、原田範行、圓月勝博、武田将明、仙葉豊、小林章夫（代表）、渡邊孔二、吉野由利訳、筑摩書房、『イギリス詩人伝』（「ジョン・ドライデン」の訳と解説を担当）、2009 年、147-261 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

①ダニエル・デフォー著、武田将明訳・解説、『ペストの記憶』(2011 年 4 月より『Web 英語青年』に連載中)
URL:http://www.kenkyusha.co.jp/modules/03_webeigo/

②平野啓一郎インタヴュー「『ドーン』と分人主義（ディヴィジュアリズム）」（聞き手：武田将明）『群像』9 月号、2009 年、154-171 頁

③平野啓一郎『あなたが、いなかった、あなた』新潮文庫、2009 年、（解説）武田将明「オルフェウスの仮面」、353-61 頁

④日本英文学会第 83 回大会特別シンポジウム「近代小説は死んだのか？――小説の過去・現在・未来」(北九州市立大学、2011 年 5 月 22 日、講師：田中裕介（代表)、原英一、平野啓一郎、都甲幸治) の企画立案、およびこのシンポジウムに備えて田中氏・原氏・都甲氏と開いた平野氏の作品に関する研究会（計５回）の主催、さらに当日の会場整備の担当。シンポジウムの当日は今回の研究期間から外れるが、準備のあらかたは研究期間内になされたので、あえて記しておく。

６．研究組織

(1)研究代表者
武田　将明（TAKEDA MASAAKI）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：10434177

(2)研究分担者
なし（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）

研究者番号：